

1. 科目名 (単位数)	スクールカウンセリング特論 (2単位)	3. 科目番号	PSMP5274
2. 授業担当教員	石川 清子		
4. 授業形態	講義	5. 開講学期	秋期
6. 履修条件・他科目との関係	履修条件は特になし	履修形態 (通信教育)	
7. 講義概要	スクールカウンセリングは、学校という生活の場の中での支援活動である。そのため、いわゆる来談型の個人支援モデルだけでは通用せず、心理職は一人で、教育の専門家である教職員らと関係を築きながら臨床実践を行うことになる。本講義では、スクールカウンセリングが有効に機能するためには、教育分野における諸問題の対応にどの様に関わって行く事が望ましいのかを考究していく。		
8. 学習目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学校教育と学校という組織の目的、その概要を理解する。</li> <li>2. 学校というフィールドにおける心理職の位置づけや役割、その活動が有効に機能するためにはどうすればいいか、について考えることができる。</li> <li>3. 講義を通し、スクールカウンセリングを実践するための、自身の課題を明らかにする。</li> </ol>		
9. アサイメント (宿題) 及びレポート課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 他の分野と異なるスクールカウンセリングの課題についてまとめる。</li> <li>2. 本講義活動を通して得られた知見を持って、自身の課題について考察しまとめる。</li> </ol> <p>*いずれも 1000 字以上</p>		
10. 教科書・参考書・教材	<p>【教科書】 石隈利紀・家近早苗 (編著)「スクールカウンセリングのこれから」創元社, 2021 年</p> <p>【参考文献】 本田恵子・植山起佐子・鈴木真理 (編著)「改訂版 包括的スクールカウンセリングの理論と実践：子どもの課題の見立て方とチーム連携のあり方」金子書房, 2019 年 吉川悟・赤津玲子・伊東秀章 (編著)「システムズアプローチによるスクールカウンセラー—システム論からみた学校臨床[第 2 版]」金剛出版, 2019 J. ウィンスレイド, G. モンク (編著)「新しいスクール・カウンセリング」小森康永 (翻訳) 金剛出版, 2001 年 その他、適宜配布資料を使用する。</p>		
11. 成績評価の規準と評定の方法	<p>○成績評価の規準 上記の学習目標を達成できていること。</p> <p>○評定の方法 授業への参加 50%、レポート 50%</p>		
12. 受講生へのメッセージ	スクールカウンセラーは、ただ待っているだけでは相談につながらず、主体的に社交性をもって活動することが求められます。学校という組織の中で、心理職としての専門性をどのように発揮できるのか、そのために何をどうしたらいいかについて、学校組織との付き合い方、教職員の認識と対応、それにどうスクールカウンセラーが関わり、連携していくかを学びます。積極的に教育環境を取り巻く社会変容に関しても注意を向けて行って下さい。		
13. オフィスアワー	授業内で周知します。		
14. 学習の展開及び内容【テーマ、学習の目標、学習の内容、キーワード、学習の課題、学習する上でのポイント等】			
1～4. テーマ	スクールカウンセリングと教職員との連携：教育の場を生かして		
第 1 回	オリエンテーション：学校教育とその目的		
第 2 回	スクールカウンセリングは何を目指すか：心理教育的援助サービス		
第 3 回	学校教育の場を生かして		
第 4 回	子どもの援助ニーズにお応じて		
	<p>【学習の目標】 スクールカウンセリングの前提となる学校という臨床現場とそこでの心理支援、スクールカウンセラーの位置づけを理解する。</p> <p>【学習の内容】 学校教育はどんな目的で何が行われる場なのか、学校生活や学校組織とその目的、システムで捉えるということ、スクールカウンセラーの位置づけを理解する。</p> <p>【キーワード】 学校教育、学校組織、システムとしての学校、スクールカウンセラーの制度</p> <p>【学習する上での留意点】 それぞれがイメージする小中学校と教育問題、そこでの課題を思い出しながら学習すること。</p>		
5～8. テーマ	スクールカウンセリングと教職員との連携：子どもの苦戦		
第 5 回	援助するスキルを磨いて		
第 6 回	子どもの苦戦に応じて		
第 7 回	チーム学校で		
第 8 回	有効にスクールカウンセラーが機能するために：日常的な活動から		
	<p>【学習の目標】 学校組織から求められることが、様々な事情により異なることを理解した上で、関係を作りつつ、スクールカウンセリングがうまく機能するようにするための諸課題を理解し、検討すること。</p> <p>【学習の内容】 スクールカウンセラー側の立場から、学校・教職員とうまく関わり、心理支援活動を行うためのポイントを押さえる。スクールカウンセラーの位置づけ・役割、関係作り、来談経緯と相談の場の設定などのポイントを理解し、そのために普段からどんな活動をするのかを扱う。</p> <p>【キーワード】 関係形成、組織から求められる役割、来談経緯と相談の場の設定、チーム学校、有効な連携</p> <p>【学習する上での留意点】 事前に配布される資料をもとに、スクールカウンセラーは何をどうすればいいか、事前検討しておくこと。</p>		

9～12.テーマ	学校における心理支援活動：様々な子どもの心理療法
第9・10回	ナラティブアプローチによるスクールカウンセリング
第11・12回	システムズアプローチによるスクールカウンセリング
【学習の目標】	スクールカウンセリングにおける実際的なポイントを具体的に理解し、自身の課題を見つける。
【学習の内容】	子どもを教え育むという学校教育とその場では、子どもは先生に何か指導されるものという暗黙の了解が存在する。例えば、担任から勧められて来談した保護者は、外部機関に自ら相談に来たC1と異なり、困っていても相談自体に積極的でなく、スムーズに相談にならないことも起こる。そのため、こうした事例の先行研究より、有効な相談になるための実践的な課題の把握を目指す。
【キーワード】	ナラティブアプローチ・システムズアプローチ
【学習する上での留意点】	事前に配布された事例を読み、疑問点などを挙げておくこと。
13～15.テーマ	スクールカウンセリングの実際：事例をもとに
第13回	不登校の事例
第14回	いじめの事例
第15回	非行の事例
【学習の目標】	実際の事例をもとに、スクールカウンセリングにおける心理支援を理解する。
【学習の内容】	不登校といじめ・非行の事例から、スクールカウンセリングで求められていること、対応上で留意すること、教職員との連携、保護者対応などを学ぶこと。
【キーワード】	不登校、いじめ問題、非行、保護者支援、教職員へのコンサルテーション・包括的カウンセリング
【学習する上での留意点】	事前に配布された事例を読み、疑問点などを挙げておくこと。